

「高校寮」という「家族外コミュニティの可能性」 : 親へのインタビュー調査をもとに

著者	綿引 伴子, 中田 淳平
雑誌名	教育実践研究 = Studies in practical approaches to education
巻	36
号	September, 2010
ページ	19-29
発行年	2010-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/25816

「高校寮」という「家族外コミュニティの可能性」 —親へのインタビュー調査をもとに—

The possibility and effect of “community outside family (community which has alternative function of family)” ; a dormitory”

: Interview with parents whose children have spent at dormitory when they were high school students

綿引 伴子

Tomoko WATAHIKI

中田 淳平

Junpei NAKADA

I 家庭教育をめぐる現状

1 家庭教育に対する行政からの関心

現代の教育政策において家庭の教育力という言葉の使用は、1984年から1987年の臨時教育審議会の議論で「家庭の教育力の低下」が指摘されたことに端を発する。それ以降現在に至るまで、様々な議論がなされてきた¹⁾²⁾。

1998年6月の中央教育審議会答申『『新しい時代を拓く心を育てるために』—次世代を育てる心を失う危機』は、1997年春に起きた、神戸での連続児童殺傷事件（「酒鬼薔薇事件」）に対して、当時の橋本首相が「心の教育」の必要性を提唱したことに対応して開始された審議のまとめである。この中の「もう一度家族を見直そう」という項目には、思いやりのある円満な家族を作るといふ家族のイメージや、会話を増やすこと、一緒に食事をとること、幼児には親が読み聞かせをすること、小さい頃から家事を手伝わせること、自然の中で遊ばせようなど、細かく多岐にわたる提言がなされている。この答申後、文部科学省は厚生労働省と連携して、「家庭教育手帳」「家庭教育ノート」「家庭教育ビデオ」の作成・配布などに取り組み始めた。

2000年12月の教育改革国民会議報告においては、「教育を変える17の提言」の筆頭に「教育の原点は家庭であることを自覚する」という項目があり、「教育という川の流れの、最初の水

源の清冽な一滴となり得るのは、家庭教育である。（中略）親が人生最初の教師であることを自覚するべきである」と書かれている。

2003年3月の中央教育審議会報告「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」においては、「家庭教育の現状を考えると、それぞれの家庭（保護者）が子どもの教育に対する責任を自覚し、自らの役割について改めて認識を深めることがまず重要であるとの観点から、子どもに基本的な生活習慣を身につけさせることや、豊かな情操をはぐくむことなど、家庭の果たすべき役割や責任について新たに規定することが適当である」という理由により、教育基本法に家庭教育に関する条文を盛り込むことが提言され条文化された。

2007年6月1日に提出された教育再生会議第二次報告においては、「提言3」として「親の学びと子育てを応援する社会へ」が掲げられ、具体的には、子どもたちの規範意識や「早寝早起朝ごはん」、挨拶やしつけ、礼儀作法を、学校や家庭、地域が協力して子どもに身につけさせることが述べられている。こうした動向を反映したかたちで、「早寝早起朝ごはん」国民運動や「子どもと話そう」全国キャンペーンに力を入れるようになった。

1990年代後半からこうした家庭教育への政策的介入が強力に推進されるようになった理由

は、2003年3月の中央教育審議会答申で次のように述べられている。「家庭は教育の原点であり、すべての教育の出発点である。親（保護者）は、人生最初の教師として、特に、豊かな情操や基本的な生活習慣、家族や他人に対する思いやり、善悪の判断などの基本的倫理観、社会的なマナー、自制心や自立心を養う上で、重要な役割を担っている。しかし、少子化や親のライフスタイルの変化等が進む中で、過干渉・過保護、放任、児童虐待が社会問題化するとともに、親が模範を示すという家庭教育の基本が忘れ去られつつあるなど、家庭教育の機能の低下が顕在化している。また、父親の家庭教育へのかかわりが社会全体として十分ではない。」家庭教育の機能の低下によって、子どもの生活習慣やマナー、思いやり、モラルなどが低下しているという認識が読み取れる。家庭教育の担い手である親のあり方をまず正し、家庭教育の機能を充実させることが必要であるとの理論構造になっている。子どもの社会化の主体としての家庭が、政策的に重要視されていると言える。

2 家庭教育に対するメディア・家庭からの関心

家庭教育に対するメディアや家庭からの関心では、2000年代にビジネス系雑誌が家庭教育にターゲットを絞って、『プレジデントFamily』『日経kids+』『Edu』等新たな雑誌を創刊し、売れ行きを伸ばしていることからわかる³⁾。

それぞれ雑誌によって方向性の違いはあるものの、受験学力や基礎学力、学業達成以前の基礎学力など、どの雑誌も学力向上へ関心を寄せている。学力には、これまでの知識の習得や言語的・数量的記号操作能力のような狭義の学力だけではなく、社会的規範やコミュニケーション能力といった人間性を問うような現代社会で要請される能力も含まれている³⁾。いずれの雑誌も、子どもに学力を身につけさせる主体には家庭や親が想定されている。狭義の学力、人間

性、社会性などあらゆる面で子どもをより発達させること、責任をもつことが親に課せられ、ますます親へ重圧が大きくなっている状況と言えよう。

3 家庭の教育力

「教育する家族」とは、近代家族の特徴を持ちながら、親はパーフェクト・ペアレンツを目指しており、しつけや教育に関しては熱心に取り組む家族である。親がジェネラル・マネージャーの役割を果たし、子どもに与えるものは親が事前にチェックしいいと思うものだけを与えるというようにサービスを使いこなし、家庭教育機能の外部化を効率よく行っている⁴⁾。自分たちにできないことにお金を投資することによって、より一層子どもたちに様々なことを教え込もうとする。

戦後の経済成長による近代家族の大衆化とともに地域共同体が解体し、家業継承の終焉を迎えた。もともと子どものしつけや教育機能は、社会的なネットワークのなかに組み込まれており家族の外にあったが、家族という単位で生き残るための戦略の一つとして、家庭での子どもへのしつけや教育が重要視された。1970年代頃からは、多くの親が自分たちこそが子どもの最終責任者であることを自覚するようになっていった⁵⁾。

「『家族の教育機能が低下している』のではなく、『子どもの教育に関する最終的な責任を家族という単位が一身に引き受けざるを得なくなっている』のである。（中略）今ほど家族の結びつきの強い時代はないし、親が子どもの教育に全面的にかかわる時代はない。」と広田（1999）は述べている⁶⁾。現在の家庭の教育力は低下しているどころか、昔の家庭での教育と比べるとより細やかな配慮をするようになってきており、新たな問題はそこから生じている。親と子の過度な癒着、また親から子への過度な期待から、キレたりバーンアウトしたりなどの問題が起きている。1980年に起きた「金属

「バット殺人事件」では、父親が教育熱心であったことが、子どもの両親殺害という犯行の動機だったと言われている⁷⁾。2000年以降増加している子どもによる親や祖父母の殺害の事件にも、同様の背景があると考えられる。

II 家族外コミュニティ

今日の日本では家庭が子どもに責任を持つべきだという規範が強いが、責任の全てを引き受けることが困難な家庭は少なくない。仮に責任を全て引き受けることができたとしても、それで問題が生じないということではない。そうした今日の社会で家庭の機能や責任とされていることを代替しうるコミュニティを、本研究では「家族外コミュニティ」と言う。「コミュニティ」とは、アメリカのマッキーバーが提唱した概念で、日本では「共同体」と訳され、今日では「地域社会」と訳されることもあるが、地域性を必ずしも伴うわけではない⁸⁾。地域性を伴わないコミュニティとして、目的型コミュニティやバーチャル・コミュニティなどの例があり、これと区別するために地域性を伴うコミュニティを地域コミュニティということもある。本研究での家族外コミュニティとは、必ずしも地域性を伴うわけではない「共同体」としての意味で用いる。例えば、石川県七尾市のカンガルーハウス^{注1)}や、加賀市のはづちを楽堂^{注2)}、三重県鳥羽市の寝宿^{注3)}、千葉県秋津市立習志野小学校の秋津コミュニティ^{注4)}を家族外コミュニティと考える。

家族外コミュニティは、家庭では担いきれない機能を家庭の外部に求めることによって、閉塞した家族から開かれた家族を創造する可能性をもっている。例えば親子の過度な癒着による問題を解決する一手段となりうる。育児不安の研究では、子育て以外のネットワークをもち活動している母親のほうが⁹⁾、また専業主婦の母親より共働きの母親のほうが¹⁰⁾、精神的により安定して子育てをしていることが明らかになっている。

III 研究の目的と方法

1 研究の目的

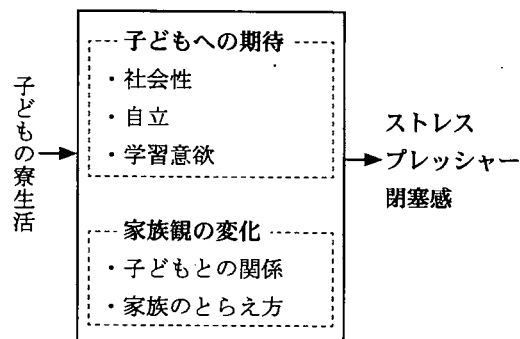
以上のような現状においては、教育やしつけを家庭に一身にゆだねるのではなく、家族外コミュニティへと家庭教育や家庭の機能を開いていくことが、親や子どもの現状改善において重要であると考えられる。

本研究では石川県七尾市の清栄寮を一つの家族外コミュニティとして注目し、清栄寮という家族外コミュニティが、子どもに寮生活を体験させた親にどのような影響を与えたかを明らかにし、家族外コミュニティの可能性について検討することを目的とする。寮生活を体験した子どもを対象とした調査は別稿に論じる¹¹⁾。

本研究の調査対象者は、後述するように公務員や教員が多く、地域の中では経済的に安定している層であり、子どもの教育に対しては比較的熱心で経済的投資が可能な親が多いと推測される。「教育する家族」の要素を多分にもつ対象者にとって、子どもの寮生活がどのような意味をもたらすのかに着目する。

2 仮説

清栄寮での寮生活をわが子にさせた親に対する影響として、次の仮説を立てた(下図)。



一つ目は、親は子どもの社会性や自立、学習や受験に対する意欲の向上を期待するのではないかと考えた。

二つ目は、わが子を寮生活させたことによって家族観に変化があるのではないかと考えた。

三つ目は、寮生活に対しての期待や家族観の変化により、家庭教育のプレッシャーやストレスから解放されるのではないかと考えた。

3 調査方法

(1) 調査対象者

2003年～2008年、石川県立七尾高等学校在学中の子どもに、距離や交通の面で七尾高校に通うことが困難なため清栄寮での下宿生活をさせた親12名を調査対象者とした。

対象者	年齢	学歴	職業
A父	56	大卒	教員
A母	50	大卒	教員
B父	53	高卒	会社員
B母	47	高卒	会社員
C父	53	高卒	公務員
C母	48	高卒	公務員
D父	52	大卒	教員
D母	50	大卒	教員
E父	57	大卒	教員
E母	54	大卒	教員
F父	56	大卒	教員
F母	49	高卒	会社員(パート)

(2) 調査時期と調査方法

2009年9月～2010年1月。

上記対象者のうち9名に対し、面接による聞き取り調査を行った(1人30分～1時間30分)。テープに録音し、それを活字に起こしたものを基礎データとする。

B父、B母、D父の3名に対しては、対象者の都合により面接ではなくて記述式のアンケート調査を行った。その際できるだけ面接調査に準じるように、ほとんどの設問は自由記述式とした。

(3) 調査内容

- ・教育や子育ての方針
- ・家庭教育に対する言説に対する考え方
- ・子どもが寮生活をおこなったことによる不安や期待、そしてそのことによる家庭の変化
- ・家庭教育に対するプレッシャーやストレ

ス、閉塞感とその変化

- ・家族のとらえ方 (Family Identity, 家族と認識する範囲) の変化
- ・子どもが寮で生活していた3年間の自分なりの意味

4 清栄寮の概要

現在七尾市には、七尾高校、七尾東雲高校(旧七尾工業高校、七尾農業高校、七尾商業高校)、中島高校(旧中島町)、田鶴浜高校(旧田鶴浜町)の4校の公立高校と、鵬高校という1校の私立高校がある。高校生が七尾市内で寮生活を行うとき、ほとんどはこれらの高校のどこかに通学している。七尾高校周辺にはおよそ5寮あり、それぞれの寮が男女別に生徒を募集している。学校が寮を斡旋するのではなく、親がそれぞれ知人などを通じて紹介してもらう。所属高校別では七尾高校の生徒が多いが、田鶴浜高校で看護・介護、七尾東雲高校でスポーツの勉強をする生徒などもある。寮生の出身地は、輪島市(旧輪島市、門前町)や能登町(旧能登町、内浦町、柳田村)など奥能登からがほとんどであり、まれに加賀地区からの生徒もいる。

清栄寮は七尾市内の寮の1つであり、上野さん夫婦が1977年から経営している寮である。1人につき部屋が1室与えられ、最大14人が寮生活を送ることができる。他の寮の在籍人数は約5名程度であるから、比較すると規模が大きい。寮費は食事代を含めて55,000円/月で、それに加えて電気代のみ各部屋で使った分を別料金で支払う。寮生たちは、上野さん夫婦のことを「おじちゃん」「おばちゃん」と呼ぶ。

部屋は一室四畳半で、玄関の上に位置する二部屋だけは、四畳半より少し広い長方形となっている。全て和室で畳が敷かれ、1間の押入れがついている。部屋には最初から置かれている物は何もなく、入居時に必要なものを購入して持ち込む。冷暖房器具は備え付けられておらず、夏は扇風機、冬は電気カーペットや電気ストーブなどを持参して、各自自分の部屋の温度

を調節する。自分の部屋に友達を呼ぶことはできるが、その際は必ず上野さんに挨拶してから上げることが規則となっている。

食事は、平日や補習のある土曜日には上野さんが用意するが、休日に食事は出ない。朝食はバイキング形式で6時頃から用意され、昼は弁当が作られ渡される。夕食は18時30分頃に用意され、学校から帰ってきた者から順番に食べる。朝食や夕食を食べる場所は1階にある食堂である。休日には実家へ帰省する者もいるが、部活動をしている者などは休日でも寮で過ごすことになる。休日は食事が出ないために、インスタント食品などを食べたり、近くのスーパーで惣菜を購入したり、ときには外食をしたりする。

テレビは、共同のテレビが食堂に1台置かれている。テレビを個人の部屋に持ち込むことはできるが、持ち込む者はほとんどいない。1階の3部屋にはテレビ線が通っているのに、テレビを持ち込めば番組を見ることができるが、2階の部屋にはテレビ線が通っていないために、テレビを持ち込んでも番組を見ることができない。見たいテレビ番組があれば、食堂の共同のテレビを使うか、携帯電話のワンセグ機能をつかって見ることになる。本調査対象者の子どもたちはテレビを持ち込んでいない。

トイレや風呂は共同である。風呂は、平日は17時頃から準備され、帰ってきた者から順番に入る。一度に2人一緒に入れるようになっているが、仲がよい者同士なら3、4人一緒に入る場合もある。22時までには全員が風呂に入らなければいけないことになっているので、風呂の前で順番に列を作って待つこともある。休日には風呂は沸かされないのだから、風呂に入りたい者は自転車で7～8分の銭湯に行く。

洗濯は各自でやることになっている。1回200円のコイン式洗濯機が1つあり、それを使って洗濯する。洗濯物は、玄関か2階の1室、または自分の部屋に干す。洗濯竿は用意されているが、ハンガーなどは各自で用意する。

消灯時刻や起床時刻は特に決まっておらず、自己責任で寝たり起きたりする。体の調子が悪いときなどは自分で病院に行くか、それができないときには上野さんが病院へ連れて行く。

親は週末などに子どもの様子を見に来たり、実家への送り迎えをしたりする際に寮に来る。頻度は家庭によって異なり、ほぼ毎週来る親もいれば、数ヶ月に1回程度の親もいる。上野さんがいるときには親は挨拶をするが、挨拶程度であり、それ以上の話をするとはほとんどない。

IV 調査の結果と考察

聞き取り調査の結果から、以下に示す1～4の4点に関連する記述を抜き出し考察する。なお「」内はインタビューイ、「()」内はインタビューアが話した内容を活字に起したものである。

1 子どもへの期待

- A父「期待したことはね、人付き合い。やっぱり人付き合い。いろんな人と付き合うことで、人間やわらかくなってくれんかなって」
- A母「私も高校行ったときに、ああいろんな人がいるとか、こんなすごい力を持った人がいるって、すごい視野が広がったので、そういう面で視野が広がればいいかなって思いましたね。苦労するかなあとは思いましたが。でも優しい先輩もいるし、友達もおるし、知っている先輩がいるっていうのは安心だったかな。」「洗濯しているかなってことが心配で週に1回行ったりとか…。」
- B父「家族と離れて暮らすので、少しでも自立心等が持てる様になれたら良いと思いました。」
- B母「いろんな人との出会いの中で、自分にプラスになることができたなら良いし、自立ができたなら良いなあと思いました。」
- C父「共同生活するのが社会に出る上でいい環境だとは思ったんです。下宿は他にも何人もお子さんが入るとし、そこでその生活をまともにできれば、将来はまあ役に立つんじゃ

ないかなってという思いはもったりしましたけども。」「先輩から教えてもらえるっていうが、塾行かなくても先輩から教えてもらえる。そういう面では、Cさえ人見知りしなければ、どんだけでも習えるチャンスはあるし、そういう面では、他の学校行くよりも寮入っていたほうが、いいなと。」「やっぱり自分たちの知ってる人が一生懸命しとるような姿を見れば、あっ俺もってというような気持ちになると思うんですね。」「1人やさかいきちっとね、朝計画立ててちゃんと、で学校も遅刻せずに行くかとか、やっぱそういう心配もした。」

C母「まず朝起きれるんだらうか。今まで起こしていたのが1人して起きてかにゃいけなかったの、朝起きれるのかなという・・・。」

D父「他人の釜の飯を食うこと。」「何をするにしても、プラス面とマイナス面がある。プラス面を期待しているのが親だと思う。」

D母「まあ一番は、精神的自立っていうか、依存心がなくなるし、要するに自分で起きて自分で行ったりっていう自立に向けての第一歩やなっていうのは思ったし。」

E父「家やったら完全に自由やがいね。でもあっこ行ったら自由じゃないから、うまいことやれるかなっていうのがちょっと心配やったし、逆にうまいことやれたら社会出てからうまいことやれるかなって。」

E母「まああとうまいことね、下宿の人、おじさんとかおばさんとかもかかわるし、うまいことやっけていけるかなって。やっけてほしいってね。」

F父「生活リズムをつくってほしいなと思ったことはありました」

調査では、親に期待と不安の両方について質問をしたが、不安の裏返しに期待でもあるということがほとんどであった。

12人中7人が共同生活や友達とのかかわり、人付き合いといった社会性を身につけることを挙げている。

12人中6人が自立について不安や期待を述べており、起床・洗濯（C母）や、生活リズム（F父）といった生活的な自立や、D母のように精神的な自立を期待する者もいた。

子どもに期待することとして勉強は12人中2人が挙げ、C父母は下宿だと先輩に勉強を教えてもらえたり先輩が勉強する姿を見られることをよい点だと述べている。

寮生活することで何も期待をしていなかった者は12人中1人であり、他の11人は寮生活で何かを身につけてほしいと子どもに期待していたことになる。寮生活は、子どもに社会性を身につけることや自立、勉強することを期待する場になったと考えられる。D父が「何をするにしても、プラス面とマイナス面がある。プラス面を期待しているのが親だと思う。」と述べるように、親は寮生活のプラスの面に期待していた。

2 親子関係の変化

A母「15歳で親と離れるんだったら、これは予測してませんでしたから、15歳で離れて生活するようになるんだったら、15年間の間しか一緒に暮らせなかったわけでしょ。だったら怒らなかつたらよかつたなあとか、もっと手をかけてあげてもよかつたなあとか、なんかそういう親の反省をしました。（中略）弟は甘やかしましたね。たつぷりと（笑）。」

C母「Cに何もしてやらなくてよくなったかわりに、逆に下の子に逆にその分もかまってたっていうか。それこそね。今まで2人分してたことが1人分でいいから、倍で今度はそっちが・・・。（甘やかしたような）うんうんうん。だからそれもよくなかったような気がするんですけど。」

D父「間が持てるようになった。」

D母「親子の、要するに親離れ、子離れ。どこかで離れていかなくはないかと思うんですけど。で、わりと今の世の中って、その離れていく時期っていうのがだんだん延びてい

ると思うんですね。(中略)そういう線引きができたのが、下宿だったのかなあって。あそこで1つ、Dにとっても私にとっても、離れることができた時期だったと思います。それを早いと見るか遅いと見るかはあれやけど、それくらいが丁度やったんかなって。」

F父「私にとっては子離れのいい機会だったととらえることができるかな。(中略)もし寮生活じゃなくて自宅の場合だったら、どうしても口出しすることが多くなっていたのではないかな。そうすると、自分なりの子離れの時期というものがある程度きちんとつくっておかないと、子どもも親離れができなくて、親も子離れができなくて、いつまでもずるずるべったりでいってしまうという危険性はあるのではないかな。」

F母「きつと、子離れはできたんだと思います。(中略)地元の高校だったら、もう少し口うるさくいろんなことを言っていたらうな。で言うだけじゃなくて実際行動にも起こしていただろうな。離れているっていうことで一枚フィルターをはさんでいるような状態。別にそこからは私が知らなくても息子が対処していってれば、そこまで親が口挟むことじゃないなと思うことが多くなった。そういう意味で子離れができたと思います。」

D母、F父、F母は「子離れのいい機会になった」と述べており、D父は「間が持てるようになった」と述べ、子どもとよい距離感をもてるようになったと感じている。

A母、C母は、兄が寮生活を始めて家にいなくなったぶん、弟に愛情を注ぎ込むようになったと振り返っている。A母は15歳で子どもがいなくなるのが予想外の出来事だったから、もっと愛情をかけてあげたかったとも述べている。

以上から、清栄寮で寮生活させることによる親子関係への影響は家庭によって異なるが、親が子離れするよいきっかけになりうるといえる。また、実家にいた子どもの人数が減った分、弟や妹により愛情をかけるようになった者もい

た。

3 家族のとらえ方

上野さん夫婦のことを第二の親だとか、寮生のことを兄弟だと思えるようになった者は誰もいなかった。子どもに寮生活をさせたことは、家族のとらえ方が緩やかになることに対して影響を与えなかったと考えられる。

4 ストレスやプレッシャー、閉塞感の軽減

A父「心配で、何かしでかしたらまずいって。やっぱこんな狭いところで育つとるから、一気に広いところ行くから、やっぱそのプレッシャーはいつもあった。(具体的に言うところのこと、もしかしたらって…)あつ、まずね、反社会的行動でしょ。あのこれはまあ法律に反するタバコとか。あとは非社会的な行動でしょ。法律には違反せんけどごちよごちよと悪いことするような…。これをするんじゃないかっていうこと、これをしないかどうかはいつも頭にあった。プレッシャーになつとった。」

C母「それはね、まあ正直もう親の手から離れた？離れていってしまったんで、心配は心配なんだけど、心配なんだけど、もう親は構わなくていいというか。悪い言い方だけ。うん。だから正直ラク、言い方悪いけど、ちょっとラクになったって言う面はありますね。言い方悪いな。(中略)だから、目の届かないところでは不安なんだけど、逆にラクになる、親は。(中略)もう私が何もやらなくてもいいっていう、まあね、もう目の届かないところ行っちゃったんだから、いいっていうラクさは、今度は寮のおばさんに迷惑をかけていることもあるかなっていうのは思ってたけれども、よっぽど何かあれば言うてくるだろうからっていう気持ちで。まあ寮のおばさんが1人いらっしやるっていうのは、親代わりじゃないけど、一応見てくださってるんだろうから、なんせ私としては気がラクに

なったって言う、ちょっとそういう気持ちがある。あれやってやらなくちゃ、これやってやらなくちゃって思ってたことがもうやってやらなくてもいいなっていうのはありましたよね。」

E母「例えば受験っていうのは親も気が張るって言うがね。でも全く。たまに帰ってくると息抜きに来るさかい、楽しんどるっていうか一緒にテレビ見たりして、何かして楽しんでっていう、久しぶりに会ったのを楽しむって感じで。受験生の時期でもあんまり(笑)。そんな感じで過ごせまし。カリカリとした覚えもないし。そんな意味では親はラクやったかも知らん。大変なところを見てないから。

(中略) たぶん受験期やったらやっぱりあんま勉強せえとか言わんように、言いたくないけど言ったかもしれんしね。そう思ったらラクやったね。子どももラクやと思うし。親からああやこうや言われんし。ラクな分自分でせんやいかんけど。」

E父(上述のE母の発言を受けて)「うん、そうや」「受験生やったらたぶん成績とか見てもうちちょっと伸びんだめやなとか。(言ったかもしれない)」

A父は、子どもが目の届かないところへ行っても何か悪さをするのではないかということから、プレッシャーを感じている。

C母は、「もう親は構わなくていいというか。悪い言い方だけど。うん。だから正直ラク、言い方悪いけど、ちょっとラクになったっていう面はありますね。」と述べており、E父母は「受験生の時期でも…カリカリとした覚えもないし。そんな意味では親はラクやったかも知らん。…子どももラクやと思うし。親からああやこうや言われんし。」と述べている。C母は、子どもが親の手元を離れてあれこれやってあげなくてはという思いから解放され気持ちがラクになったと感じていた。しかし、「ラク」という言葉を発することや、そのような気持ちになることに少々うしろめたさを感じても

いる。E父母は、受験生の子どもをみてカリカリしたり、子どもにうるさく勉強のことを言ったりせずに済んだことが、親も子どももラクだったと振り返っている。C母やE母は「ラク」という言葉を何度も発していた。

それ以外の者は、寮生活を始めるまでの家庭教育にあまりストレスやプレッシャーを感じておらず、感じていた時期があっても子どもが幼少期のことであり、既に解決済みであった。

以上から、清栄寮での寮生活は、親の家庭教育へのプレッシャーやストレスに影響を与えるが、プレッシャーやストレスが軽減することもあれば、子どもが見えないことでの不安など違った新たな問題が浮上する可能性もあると考えられる。

V 家族外コミュニティの可能性

以上から家族外コミュニティの可能性という観点から考察する。

一つ目は、生活的自立や精神的自立、社会性を身につけること、勉強を教えてもらえることなど、寮生活を通して子どもに様々なことを学んでほしいと親は期待をしていた。社会性では特に人付き合いや共同生活を学ぶことを期待した親が多く、これらの能力は親と子どものかわりだけでは身につけにくい能力であるからだと認識していると考えられる。また、寮に対する期待が大ききということは、自分たち親が実際に躰や教育を行う責任を委ねる意識のあらわれを意味するとも思われる。家庭の機能を親以外にも分散させることは、親の精神的・物理的負担を軽減することになると考えられる。ただしここに挙げた親の期待は、それを主目的として子どもを寮に入れたというわけではなく、七尾高校に通うことが困難なため、寮生活を選択したということがまず前提としてある。

二つ目は、親子関係に物理的な距離が存在したことによって、親は子どもの存在を再認識し、親子関係に変化をもたらしていた。子離れのよい機会になったという意見もあり、子ども

との距離のとり方を考える機会になると考えられる。換言すれば、本調査対象のなかには「子離れ」を課題としてしまう親が多いといえる。

三つ目は、親の家庭教育に対するストレスやプレッシャーに与える影響である。子どもが親の手元を離れたため、あれこれやっただけでなくという思いから解放され気持ちがラクになったと感じプレッシャーが軽減された人がいた。また、受験生の子どもに対しうるさく勉強のことを言わずに済んだことが、親も子もラクだったと振り返っておりストレスから解放されたといえる。2人の母親は「ラク」という言葉を多用していた。一方で、子どもが目に届かない場所にいることで逆にストレスやプレッシャーを感じる人もいた。地域性が反映していると思われるが、そもそも家庭教育に対するストレスやプレッシャーをあまり感じていない、または感じていても幼少期のことであり既に解決済みである人もいた。

先述したように「教育する家族」の要素を多分にもつ本調査の対象者にとっては、子どもが高校生になっても、子どもを育てる責任、学業達成へのプレッシャーは少なくない様子がうかがえる。入寮することによって、子どもと同居している場合ほど子どもに教育することができないし、またしなくても周囲から非難されることはなく、精神的・物理的負担が軽減される。自分のできない分を、寮父母や寮生との生活に期待している。

同居していると、学業面だけでなく生活的自立や社会性を身につける場面でも親の過度のかわりや配慮が多くなり、子どもの自立の機会を奪いがちである。入寮をきっかけに子どもと物理的に離れることによって、一緒に生活していると困難になる子離れがスムーズになり、子どもの自立を促すことにつながるといえる。

VI 課題

1 寮という家族外コミュニティの課題

いずれの対象者も、高校で寮生活をしたこと

に対し、親にとっても子どもにとってもマイナス評価はほとんどなかったが、次のような課題があげられる。

・寮にかかる費用

清栄寮での1ヶ月の家賃（食事代などを含む）は55,000円であり、それにプラスして日常生活での雑費などがかかるが、他の寮の家賃は8万円～10万円程度であり、それと比較すると安めの価格設定である。それでもD父は「経済的な負担。（ほぼ大学生と同じだけの費用が必要であった。）」と述べている。寮生活をさせてよくなかったことは何かという質問に対して経済的な問題を挙げたのはD父のみであったが、Dの家では両親がフルタイム就労（父母ともに教員）であっても経済的な問題を取り上げることから、他の家庭にも同じような問題がある可能性が高い。

本研究での対象者は、公務員や教員に偏りが多く見られた。能登における公務員の位置づけは、経済的にかなり安定した地位にあると考えられ、このことが子どもの寮生活を可能にしている。子どもの自立や学歴、人格形成を意図する近代家族が教育サービスを購入しているとも考えられる。しかしIV、Vに挙げたような効果が期待できるとすると、今後経済負担が少ない形で、親子に距離があり、子どもが様々な人間とかかわることのできるようなコミュニティのあり方が模索されてもよいのではないだろうか。

・兄弟姉妹（きょうだい）への影響

親と子が物理的に距離をとることは、親子の関係が密になりすぎている場合には、親子両者がお互いを再認識したり自立したりする機会となるため有効といえる。しかし、物理的な距離をもってしても親が子離れできないときには、親の愛情の対象が弟や妹など実家に残った子どもに注ぎ込まれる可能性があることも明らかになった。そうした場合実家を出た者はいいが、実家に残った者は親子関係が密になりやすく、ストレスやプレッシャー、閉塞感を感じるので

はないかと考えられる。親の家族観や子ども観、教育観が根本的に変化しないと、きょうだいへのマイナス影響は解消しないだろう。

・親の家族のとらえ方

今回の調査では、上野さんを家族のようだととらえる感覚を持った人は1人もいなかった。親の寮とのかかわり方は、寮に子どもを訪ねたときに、上野さんと挨拶する程度のかかわりである。自分の子ども以外の寮生や関係者と親交をもつことで家族のとらえ方が緩やかになると考えられるが、親が親交を持つような時間や場を作ることは難しく、清栄寮での寮生活によって親の家族のとらえ方を緩やかにすることは現状では困難であると考えられる。

2 本研究の課題

以下のような観点を研究に取り入れ、今日の社会や家族にとっての寮という家族外コミュニティの意味や課題をさらに検討する必要があると考える。

- ・親の職業の偏り
- ・家庭教育に関するストレスやプレッシャーと地域性
- ・寮の経営者へのインタビュー
- ・女子の場合
- ・他の寮の場合
- ・進学校でない場合

また、先述したはづちを楽堂やカンガルーハウス、習志野市立秋津小学校での秋津コミュニティ、グループホームなど、寮以外の様々な家族外コミュニティの調査により、家族外コミュニティの多面的・普遍的な可能性と課題を探る必要があるだろう。

なお、本稿では「高校寮」を「家族外コミュニティ」の1つとしてとらえたが、「コミュニティ」ととらえることが妥当なのか、他の用語が適当であるのかは課題として残った。今後検討していきたい。

【注】

注1) 石川県七尾市和倉の旅館加賀屋が従業員用の託児付き宿舎で、長時間保育、早朝・深夜保育、病児保育、学童保育など、ゼロ歳児保育を除いて日本の保育行政の欠陥が満たされている¹²⁾。

注2) 石川県加賀市山代温泉共同浴場前にある施設であり、非営利活動市民団体はづちをがスタッフやボランティアで運営を行っている。はづちを楽堂のある地域には山代温泉があることから、温泉街で働き夜型の生活をする親が多いため、子どもの食事を親が作るのが難しい現状がある。はづちを楽堂はこうした子どもたちのために朝食を提供することを有料サービスの一つとして行っている¹³⁾。

注3) 三重県鳥羽市答志島答志地区の日本で唯一残存する寝宿制度である。中学校を卒業した男子が地区のある大人と寝屋子-寝屋親という関係を持ち、寝屋子の解散(約28歳)まで寝屋親の家で集団で寝泊りを共にする。寝屋子の解散後も寝屋子-寝屋親、寝屋子-寝屋子の関係は続き、一生の付き合いをする。寝宿はしつけ的な機能や深い人間関係をつくる機能をもっている¹⁴⁾¹⁵⁾。

注4) 千葉県習志野市立秋津小学校では、秋津コミュニティとして高齢者から子どもまで老若男女が集まって活動を行っている。活動を通して、母親だけではなく父親や地域の人たちで子どもを育てることができており、子どもたちはその中で自信や社会性を身につけながら育っている¹⁶⁾。

【引用文献】

- 1) 小玉亮子「教育改革と家族」日本家族社会学会『家族社会学研究』No.12 (2) p.185～196 2001年
- 2) 本田由紀『「家庭教育」の隘路』 p.3～18 2008年
- 3) 松田洋介「現代の育児雑誌と家族の教育戦略」教育科学研究会編集『教育』国土社

p.28～35 2008年

- 4) 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』
講談社現代新書 p.112～128 1999年
- 5) 前掲書4) p.116
- 6) 前掲書4) p.127～147
- 7) 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書
p.50 2004年
- 8) 佐藤春雄「V学校と地域社会」 葉養正明
編『教育の制度と経営 四訂版』学芸図書株
式会社 p.79,80 2008年
- 9) 山根真理「育児不安と家族の危機」『家族
問題－危機と存続』ミネルヴァ書房 p.21～
40 2000年
- 10) 内閣府「国民生活白書－家族のくらし－」
平成13年度版
- 11) 綿引伴子・中田淳平「「家族外コミュニ
ティ」の教育効果－高校寮生活経験者へのイ
ンタビュー調査をもとに－」金沢大学学校教
育学類附属教育実践支援センター『教育実践
研究』第36号 p.1～18 2010年
- 12) 上野千鶴子『家族を容れるハコ 家族を超
えるハコ』平凡社 p.126～128 2002年
- 13) 『厚生福祉』2003年2月18日 p.10
- 14) 宮前耕史「寝宿における人間関係と「老
い」答志町答志の事例から」国立博物館「国
立歴史民俗博物館研究報告」第91集 p.380
2009年
- 15) 横浜勇樹・上野利三「三重県答志島の
「寝屋子」にみる持続可能な地域コミュニ
ティ形成に関する研究」三重中京大学地域社
会研究所『三重中京大学地域社会研究所報』
第21号 p.107～125 2009年
- 16) 川崎末美「地域社会に家族を開く－子ども
の社会適応力を育てるために－」 須永和宏
編著『子どもを救う「家庭力」』慶應義塾大
学出版会 p.81～120 2009年